

自分の正しさを捨てよ

丸山 勉

[聖書] マタイによる福音書 18章 21～35節

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったのも、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

[序] 9月を迎えて

9月に入りました。「聖書教育」誌に基づく9月は旧約聖書の「ルツ記」を学ぶことになっていますが、今日は思うところがあって、**イエス様のたとえ話**の一つからご一緒に考えてみたいと思っています。今、思うところがあってと言いましたが、一つは先週までヨセフ物語を読んで、最後のテーマが「**赦し**」であったことを思ったことがあります。また、先月は「**平和月間**」ということで、礼拝もそのことを心に覚えながら捧げてきた事を思いますが、実は私は先週夏休みを頂いて、妻と広島に旅行をしてきたのです。その時のこともちょっとお話したいと思います。「**平和**」のことで色々と私自身考えさせられました。そして、今日は月の第1週でもありますので、**主の晩餐**を頂く前に、今日の主イエスの言葉を聴くことはとても意味があると思ったからです。「ルツ記」は、来週からご一緒に味わって行きたいと思っています。

[1] 原爆から見えてくるもの

川越市から程近い東松山市には「**原爆の図・丸木美術館**」という美術館があります。

丸木位里さんは既に1995年に、丸木俊さんは2000年に亡くなっていますが、丸木夫妻の手による、その全14部からなる「原爆の図」は、その構図と言ひ、大きさと言ひ、何より訴えてくるものの強さの前に、圧倒されてしまいます。それは出来事としては悲惨な光景であり、目を覆いたくなるような絵とも言えるのですけれども、作者が描きたかったのは、間違いなく「人間」そのものなのだと思います。

今年になって、**広島**の**平和記念資料館**がリニューアルオープンしました。中身に対しては色々な声があります。特に、皮膚が崩れ落ち、瓦礫の中を彷徨う被爆者人形が無くなったことに賛否両論あるようです。私も人形が無価値だとは思いませんけれども、模倣では本当に伝えたいものは伝わらないような気がしています。今回のリニューアルは、被害を受けた者とその家族がどれだけ塗炭の苦しみを受けたのかという、言わば「人間」の生活と内面にフォーカスを当てた様な展示が多かったと思います。その日少年が持っていた丸焦げのお弁当箱がありました。或いは亡くなった3人の男の子の友達が身に付けていた服や帽子やゲートルがボロボロに崩れている、それを在りし日の一人の人の様に見せていたり、何日か前に写真館できれいな写真を撮った若い女性が、あの日を境に顔もやられ、やがて亡くなったというエピソードと写真…などなど、胸が締め付けられる展示が沢山ありました。

何かを語り継ぐということは、ただ言葉を語ればよいということではないということも思いました。「被爆体験伝承者講話」というのもお聞きしました。「被爆者一世」で語れる人はもう僅かですので、**その思いを受け継ぐ方々**が志願して語る訳です。私が聞いた方は、お母様が被爆者の方で、ご兄弟も被爆で亡くされています。お母様自身は雄弁に語る方ではなかったようです。その娘である伝承者の方は、学ばれたり体験を聞かれる中で自らも「伝承者」となりたいと思われたそうです。今後はそういう方々の存在が大事になるのだらうなと思いました。熱くというよりは静かに語って下さるその話は、このような事実があったことを伝えて下さり、有益な時間だったと思います。「伝承者」とは、単なる客観的な報告者ではない筈ですのでその意味では「証し人」とも言えるのではないかと思います。

しかし私はそれ以上に、人の言葉ではないのですが、その資料館の少し南に行った川べりに、当時の**広島市立高等女学校の慰霊碑**に考えさせられました。この学校は、市内の学校では最も多くの犠牲者を出しています。8人の先生全員と679人の生徒が被爆で死んでいます。その大半は、「建物疎開」と言って、火事になった際に延焼を塞ぐため、建物を崩していく力仕事に駆り出されていた実に多くの若者たちが、朝の8時15分、一瞬のうちに光に打たれ、次々に死んでいったのです。

この慰霊碑には、花崗岩に3人の女生徒の姿が掘り込まれていますが、真ん中の

女生徒は箱のようなものを手に抱えています。この子を、両脇から2人の女の子が頭に手を置き、慰めています。その中央の子が抱えている箱には、「慰霊」とか「原爆」という文字はありません。そこには**数式「 $E=MC^2$ 」**と刻まれているだけです。これは原子力製造にも応用されたアインシュタインの相対性理論の公式なのですね。戦後間もなくはまだ米国の占領下にあったため、**報道規制**で「原爆」の語さえ用いることが許されず、これが原爆の慰霊碑であることを何とか伝えたい、という思いから岩に刻んだ数式だということです。この数式が描かれている箱を女の子が抱えているのです。この箱は、まるで「**パンドラの箱**」のようではないか、と思いました。決して開けてはならない箱を人間は開けてしまった。「それは“今”に繋がっているのではないのですか？」と、この慰霊碑は迫ってくるのです。

[2] 「ダブル・スタンダード」

私は、今回広島に行って、私たち**普通の生活者の日常**というものは、いつもとても危ういものの上にあるのであって、権力者の動向というものを私たちはいつも人類の一人として、注意深く見ていかねばならないということを思いました。「**見張り役**」ということです。また、「**戦争**」と**私たちの心**は、実に密接に結びついていること、それを見つめていないと足元をすくわれる事がある、ということです。

「**二重基準**」、「**ダブル・スタンダード**」という言葉があります。辞書によると、「**対象によって適用する基準を変えること。**」とあります。分かりやすく言うと、例えば、同じ過ちを犯したとして、強そうな人には見てみぬ振りをし、弱そうな人にはひどくあたるとなようなこと。或いは、まあ、原則はこうだけれど、それを言ったら利益が上がらない。何でも例外はあるよ、といった、**自らの都合を通す術**と言っても良いと思います。人間はみんなそんな「矛盾」や「卑怯」をどこかで持っていると思います。しかし、これはやはりとても恐ろしい「**罪**」なのではないでしょうか？

「**安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから**」と、**原爆死没者慰霊碑**には刻まれていますが、本当に過ちを繰り返さないと思いつながら、原爆と同じエネルギーの原子力発電所の再稼働が次々と行われたり、唯一の被爆国として二度とこのような核兵器による殺戮が起きないように誓う、と言いつながら、核兵器禁止条約には不参加です。批准もしていません。正に「**ダブル・スタンダード**」ではないかと思いつます。そして防衛費予算はどんどん膨らみ、税率も高くなる。本当に今日本は「平和」なのではないでしょうか、と言いたくなります。

しかしこれは日本だけではないでしょう。世の権力者は体制維持の為には様々な**矛盾**をも飲み込んで、市民をあれよあれよという内に支配してしまいつます。その為には「**敵愾心**」というものが人々の一致の材料になります。現在はどうかでしょうか？

[3] リアルな「仲間を赦さない家来のたとえ」

私は、マタイ 18 章の、イエス様の「仲間を赦さない家来のたとえ」は、大袈裟のように思えて、**実にリアルな話**のように聞こえてくるのです。ここには**二重基準、ダブル・スタンダードの罪**がハッキリと描かれています。先ほど、私は「戦争」と私たちの心は、実に密接に結びついている、と申しました。それがここにあると思います。他者を赦せない私たちの心です。「**自分の正しさ**」に固着する心です。

後半の方から見てみますと、家来は自分に借金をした者に返してくれと言いました。**百デナリオン**、まあ、日本円で**百万円**と換算しておきましょうか、借金ですから返されなければなりません。この要求は確かに「**正しい**」要求です。しかしこの借りた者は、今は返せないのではしばらく待ってくれ、必ず返すからと頼みました。しかし、百デナリオン貸した者は怒りに怒って「**赦せぬ**」とこの者を牢に閉じ込めてしまったというのですね。何と心が狭いのでしょうか、と私たちは思います。けれど、私は思ったのですが、これが「戦争」ではないでしょうか？ 相手の立場を無視し、聴こうともせずに、叩いてしまう、ということ。

丸木美術館の学芸員の岡村幸宣さんという方が、この様なことを書いておられます。—「戦争だけでなく、かたちを変えた暴力は、いつも時代にも存在します。公害や原発事故、貧困、差別、偏見…、私たちの社会はそんな構造的な暴力の上に成り立っていると言えるでしょう。**人は誰でも、自分の痛みには敏感になります。けれども他人の痛みを感じることは難しく、遠い国の人の苦しみは、忘れてしまうこともあります。**しかしだからこそ、もっと弱い立場の人の痛みを、想像力を広げる必要があるのだらうとも思います。」(岩波ブックレット『原爆の凶のある美術館』から)

岡村さんは「想像力を広げよ」とおっしゃいます。それも本当に大事だと思います。しかし、私はそれにも限界があると思います。私たちは、と言いますか私自身は、基本的に安穩を良しとする怠け者なのです。本当の意味で、他者に共感・共苦ということが出来ないのです。

けれども、そんな私たちが、想像力を駆使すると言うのではなく、聖書は、私たちが忘れて「**事実**」に立ち帰りなさい、と言っていると思います。このたとえで言うと、それは、私たちが、実は神様から、到底有り得ないような破格の「**赦し**」を頂いているというその「**事実**」です。**一万タラントン、約 6000 億円**というとんでもない借金、負い目を私たちは、神様の前に負っているのです。自分でも気付かぬ内に、罪に罪を重ねるその大きさです。これを清算し切らないと、まことの王、神様の前に滅ぼされても仕方がない存在なのですね、人間は。この人は「必ず返します

から」と強がりを行いました。でも絶対に不可能であることをよく分かっている主君は、この人の返済能力によるのではなく、**ただ「憐れに思って」彼の借金を、罪を、帳消しにして下さった**のです。この「憐れに思って」というのは、「スプリングニゾマイ」と言って、「はらわたが千切れるほどに心を痛めて」ということです。私たちは想像力に欠ける者ではありますが、この主君、つまり神様は、想像力どころではなく、私たちのために体も心も痛める方なのです。私たちと“一つ”になって下さる。それは、ある意味、神様がご自分のメンツを捨てて私たちを抱きしめて下さったということです。それは神様の独り子**イエス様の十字架**を見れば、良く分かるではないですか！これが**私たちに対する「赦し」の「事実」**です。私たちがこの世界で生きているということは、この神に「赦されて」生きている、あなたは“神の子”として大胆に生きて行ってよい！とされているということです。

しかし、このたとえ話の恐ろしいところは、このような神様の一方的な赦しを体験した者でも、自分を失うほど他人を裁く心に捕らわれてしまうことがあるということです。**自分が神の子の犠牲の上に生きている、それほど私の命はかけがえのないものとして尊いのだ、ということを見失ってしまうから**です。これは「想像力」の領域ではなく、「信仰」の領域なのです。そのことに**聖霊**が気付かせて下さいますし、**聖霊**がその「赦し」に生きる力をも与えて下さいます。

[結] 兄弟、隣人と一緒に生きる道

このたとえ話の家来は、百デナリオン借りた者に対して寛容になれず、酷い仕打ちをし、結果として主君から怒りを受けることになりました。

「『わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(18:33～35)

これは厳しい言葉に聞こえますが、「お前は、わたしの力を受けてそう出来るはずだ。わたしの赦しを無駄にするな。そうでないと、あなたの正しさがあなた自身を損なうことになってしまう」という、招きの言葉だと思います。そして「兄弟を赦さないなら」とあるように、神様は、私たちが自らの正しさにしがみついて他者を裁くのではなくて、「**兄弟**」と**一緒に生きること**(主君は「**仲間**」と言っています)、「**隣人**」と**一緒に生きること**をこそ望んでおられるのだと思います。まことの「**平和**」への道は、**十字架の主を仰ぎ、主に従う道**以外ではないのではないのでしょうか。このチャレンジを受けて、この命を生きて行きたいと思います。

お祈り致します。